

都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う

# 川辺遺跡発掘調査

現地公開資料

平成27年1月17日（土）13:30～14:30

◆ 公益財団法人 和歌山県文化財センター

和歌山市岩橋1263番地の1 TEL: 073-472-3710 FAX: 073-474-2270

## 1. はじめに

当センターでは、和歌山県の委託を受けて、昨年11月から和歌山市藤田・川辺に所在する川辺遺跡の発掘調査を実施しています。

川辺遺跡は、紀ノ川下流右岸に位置し、紀ノ川が形成した自然堤防と和泉山脈から流れる雄ノ山川の扇状地に展開しています。遺跡の範囲は、東西約1000m、南北約650mと広大で、付近の標高は11.0～13.0mです。元々は水田地帯でしたが、近年は急速に商用地や住宅地として開発されています。

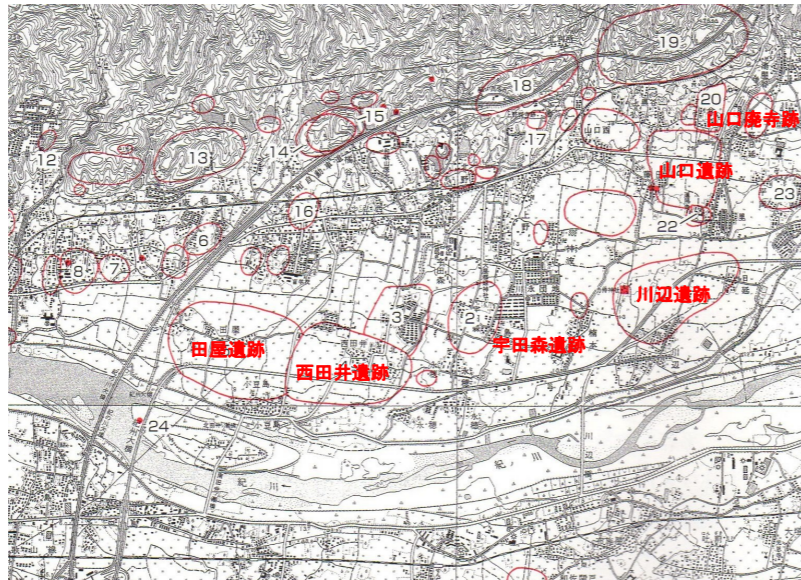
扇状地上には北方向に山口遺跡や県指定史跡の山口廃寺が、自然堤防上には下流方向に西田井遺跡や田屋遺跡などの紀ノ川流域を代表するような集落遺跡が連なっています。また、遺跡の北側を古代の南海道が東西に走り、遺跡付近を熊野参詣道が南北に通るなど、遺跡の周辺は交通の要衝でもありました。

川辺遺跡は、これまで当センター及び和歌山市教育委員会・財団法人和歌山市都市整備公社により、国道・県道や住宅・商用地施設の建設に伴い、数多くの発掘調査が実施されています。調査では、縄文時代晩期の土器棺墓、弥生時代から古墳時代にかけての集落や前方後方形の周溝墓、古代の掘立柱建物や道路状遺構、中世の掘立柱建物などが見つかっています。これらから、川辺遺跡は縄文時代から中世にかけての大規模な複合遺跡であることが明らかになっており、集落や墓地などの位置も、時代によって変遷していることが窺えます。

## 2. 調査の成果

今回、調査を実施しているのは遺跡範囲の北西部で、調査前の現状は畑地でした。調査面積は814㎡です。調査は3面の遺構面を対象として実施しており、これまで第1遺構面と第2遺構面の調査が終了しています。

**第1遺構面** 中世後半頃から近世頃の水田面で、南東部は数十cm高くなり、水田に段差があったことが窺えます。見つかった遺構には、耕作に伴う鋤溝などがあります。鋤溝の方向は、ほとんどが東西ですが、西端でそれに直行する方向の鋤溝が見つかっています。犁（か



周辺の遺跡

(『川辺遺跡 第4・5・6次発掘調査報告書』財団法人和歌山市都市整備公社2008掲載の図を転用)



第1遺構面



第2遺構面

らすき)を引く方向が異なっているのは、水田区画の違いに起因する可能性があります。

**第2遺構面** 鎌倉時代頃の水田面であるとともに、古墳時代から鎌倉時代の生活面です。南東部には、やはり段差が存在し、一段高くなっています。見つかった遺構には、水田耕作に伴う鋤溝のほか、東西方向と南北方向の溝、落ち込み状遺構・土坑などがあります。

東西方向の溝は、古代のものと考えられます。南東部の段差に平行するように、ほぼ同じ方向に掘削されています。同様な溝は、東側の道路部分でも確認されており、微高地の後背地に延々と掘削されていたことが窺えます。

落ち込み状遺構は、調査区中央北寄りに存在します。規模は東西約15m、南北9m以上、深さ0.4mを測ります。北側が調査区域外のため全容は明らかではありませんが、形状も不定形で、再掘削を行っている可能性もあります。東西の溝と同様に古代のものと考えられます。

土坑は、南東部の一段高い箇所で見つかりました。形状は楕円形で長さ1.50m、幅1.25m、深さ0.90mの大きさです。遺物は鎌倉時代前期頃の瓦器や土師器、瓦質土器などが出土しています。当時の食器類が一揃い出土し、完形品も多くあります。



鎌倉時代の土坑

**第3遺構面** 古墳時代以前の地形であると考えられ、東西に谷状地形が走っていることが、部分的な掘り下げにより想像することができます。今後の調査により2月初旬頃には内容が明らかになります。

## 3. まとめ

調査区南東部の高まりは微高地の縁辺部で、集落の中心はスーパーセンターや国道24号付近であったことが想像できます。調査で出土した遺物の量が少ないのも、集落の中心から、やや離れているからであると考えられます。

東西に走る溝は、古代の水路の用途が考えられ、落ち込み状遺構に関しては、溝との重複関係が平面で検出できないことや、底の高さがほぼ同じであることなどから、用水を一時的に溜める池であった可能性もあります。

調査区付近が水田となるのは中世前半頃で、それ以降、近・現代まで連綿と水田として推移しています。